

第9回 PEPNet-Japan 米国視察 「AHEAD 年次会議への参加と周辺大学訪問」 報告

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

蓮池通子 石野麻衣子 大橋弘依 白澤麻弓 中島亜紀子 磯田恭子 関口絃未 萩原彩子

要旨: 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワークでは、この度米国にて行われた Association on Higher Education And Disability (以下、AHEAD) 年次会議への参加、および、シアトル市周辺大学の視察を実施し、米国における障害学生支援の最新情報の収集を行った。AHEAD では、障害学生支援担当者同士が各大学で実施する支援内容を検証するセッションがあり、自らの支援に対する姿勢を多角的・客観的に捉えることの重要性が明らかになった。また、University of Washington の視察では、聴覚障害学生支援担当者から、質の高い講義内容を保障するための支援ポリシーとその方法に関する情報を得ると共に、聴覚障害学生・生徒向けサマープログラム見学では、充実した情報保障の中で、コンピュータサイエンスを学ぶことの意義を確認することができた。

キーワード: 聴覚障害, 障害学生支援, 支援コーディネーター, AHEAD

1. はじめに

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（以下、PEPNet-Japan）では、これまで大学などの高等教育機関における聴覚障害学生支援について、啓発教材の作成や研修会の開催などさまざまな取り組みを行ってきた。また、米国の国立ろう工科大学（以下、NTID）や PEPNet の協力を得て、聴覚障害学生支援に関する先進的な取り組みを行っている大学などの視察も行ってきた。これにより米国における聴覚障害学生支援の全体的な状況については比較的詳細な情報を得ることができた。

一方、米国で障害学生支援全体を概観する上で重要な団体に Association on Higher Education And Disability (以下、AHEAD) がある。AHEAD は米国の高等教育機関において障害学生支援担当者の連携を図る組織で、毎年国内外の障害学生支援担当者が一堂に会する年次会議を開催している。PEPNet-Japan の事業においても AHEAD の資料を参考にする機会が増えていることもあり、この年次会議に参加することで、AHEAD に関する詳細な情報を得て、今後の事業運営に役立てたいと考えた。さらに、PEPNet の協力を仰ぎ、年次会議開催地である米国ワシントン州シアトル市の近隣大学を訪問し、聴覚障害学生支援コーディネーターと懇談することで、これまで訪問していない地域での聴覚障害学生支援がどのように行われているのかなどについて知見を得たいと考え本視察を実施した。本レポートでは、AHEAD 年次会議

の様様に触れるとともに、PEPNet-Japan 独自の視察地として訪れた University of Washington の聴覚障害学生支援コーディネーターとの懇談を中心に取り上げ、その特徴的な支援の内容やコーディネーターの業務と役割、そしてコーディネーターの支援に対する考え方などについて報告する。

2. 視察概要

本題に入る前に今回の視察の概要を記す。本視察の日程等は以下の通りである。

・視察期間

2011年7月10日(日)～7月18日(月)

・視察地

1) University of Washington (7月11日)

2) AHEAD 年次会議 (7月12日～14日)

(ワシントン州シアトル市

於: ワシントンコンベンションセンター)

3) Highline Community College (7月15日)

PEPNet-Japan 独自で企画した上記 1) および 3) への視察については、PEPNet-Northeast の Desiree Duda 氏、PEPNet-West の Mary Morrison 氏の協力を得た。ここに感謝の意を表したい。

・視察者

視察者は、PEPNet-Japan 事務補佐員から3名、加えて PEPNet-Japan 連携大学・機関の方で AHEAD 会議

に参加をされていて、本学の視察スケジュールに同行を希望される方を募り、近隣大学への視察に同行いただく形を取った。

- ・PEPNet-Japan 事務補佐員
筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター
特任助手 蓮池通子
特任研究員 石野麻衣子
事務補佐員 大橋弘依
- ・同行者
愛媛大学 太田琢磨氏
東京大学 北林かや氏

3. AHEAD 会議と Three College Tour への参加

まず、AHEAD 会議の様子について簡単に報告する。AHEAD 会議は、本会議が7月13日から16日の4日間行われ、その前の7月11日、12日はプレ会議と呼ばれる講習会形式の集まりが実施された。本視察では、7月12日の午後にプレ会議の特別企画として米国国外からの参加者を対象にして実施された Three College Tour と、7月13日、14日の本会議に参加した。

最初に参加した、Three College Tour では、University of Washington、Seattle University および Seattle Community College の3つの大学の支援室やサポート設備の見学を行った。

この企画は、全障害に関するサポートサービスについての紹介で、Seattle University ではバリアフリー設計で建てられた学生寮を見学し、Seattle Community College では短時間で教職員に障害学生支援について理解してもらえるよう作成したDVDが上映されるなどした。短い時間ではあったが、同じ市内にあるこれらの3つの大学が規模や設置形態は異なるものの、よく連携を取り合っているのであろうことがツアー中の様子からうかがえた。

次に、AHEAD の本会議となる7月13日からは、朝から3～4つのブロックが準備され、1つのブロックで12～13ものセッションが同時並行して行われた。期間中、9ブロック約100あまりのセッションが行われた。これらのセッションでは、障害学生支援を担当している職員やコーディネーター自らが、自身の任務を遂行する上での創意工夫や、近隣の大学とともにやっている障害学生支援に関する取り組みや調査などを発表したり、サポート機器を開発している業者などが最新の機械の情報などを発表していた。発表で扱われる障害種は、視覚・聴覚障害や肢体不自由、発達障害に関するものや、戦争で障害を負った元兵士の学生へのサポートなどさまざまである。我々は、主に聴覚障害に関するサポート方法や、障害学生支援コーディネーターの仕事と役割に関するセッションに参加した。

セッションへの参加を通して、コーディネーターや障害学生支援担当者が自らの仕事を異なる角度から見ると努力をしていることに感心させられた。あるセッションでは、自分たちが障害学生に対しての「門番 (Gate keeper)」（障壁）になる場合と「門扉を開ける人 (Gate Opener)」（支援者）になる場合の両方の可能性があることをお互いに発表していた。そこでは、自分たちが支援をするはずの障害学生に立ちただかる「門番」(障壁)となっていることがまだまだあり、コーディネーターはそれらに気を配り、改善をする努力を続けなければならないということが話された。また、ノートテイカーの派遣や養成に関するセッションでは、より良い技術を持った質の高いノートを作成できる学生を探す場合の苦労や悩みなどについて、参加者同士の活発な議論や意見交換がなされた。次から次へと途切れることなく発言が続き、参加者がその場からできる限り情報を得ようとする積極的な姿勢が見られた。そこには、お互いの姿を見て、議論をすることで自らの仕事を検証するコーディネーターたちの姿があった。このように、自身の仕事を客観視することはコーディネーターには必要不可欠であるということを改めて実感した。

4. 近隣大学への視察

視察1日目と5日目にはAHEADの企画とは別に、PEPNet-Japan 独自で近隣大学の視察を行った。今回は、University of Washington と Highline Community College の2校を視察した。その中でも特に印象の強かった University of Washington について報告したい。

今回、University of Washington (以下、UW) でお会いしたのは、Disability Services Office の聴覚障害学生支援コーディネーター、Tobias B. Cullins 氏である。彼は、今回の訪問地である UW のシアトルキャンパスと、少し南にあるタコマキャンパス、バツソルキャンパスのすべての聴覚障害学生支援と教職員および一般向けのサービスコーディネートをたった1人で担当している。シアトルキャンパスだけでも、1クォーターあたり約30名の聴覚障害学生、そして、15人の聴覚障害のある教職員が在籍・在職していて、9月から始まる次学期も200時間分の情報保障者のコーディネートをしなければならないということであった。彼の仕事は、このような手話通訳者および文字通訳者の手配とスケジュールリングの他に、聴覚障害学生の相談や、補聴機器の貸し出し管理などである。後ほど「コーディネーターに必要な技術や能力で必要な物は何か」と伺ったところ、「整理整頓の力」とお答えになったように、これだけの数の人と物のスケジュールリングするにはきちんと情報を整理してどこに何があるかを把握しておく必要があり、これがとても大切であると感じられた。

5. 聴覚障害学生支援コーディネーターという仕事について

前項で述べられたような環境で仕事をされている Cullins 氏に UW での聴覚障害学生支援に関すること、ならびにコーディネーターという仕事に関する質問をおこなった。以下にその質問の内容を報告する。

Q / 在籍している聴覚障害学生が利用しているサービスで多いのは何か。

A / 文字通訳を使う学生が多い。今在籍している学生は、人工内耳を装着し始めた最初の世代にあたる。そのため、大学に入る以前も聴覚活用で授業を受けていて、手話を習得していない学生が多い。また、UW で一番希望が多いのは、CART (特殊キーボードによる速記タイプ) による文字通訳。正確性が高いため人気がある。その他にも Typewell と C-Print (いずれも日本でいうパソコンノートタイプの単独入力に近く、短縮入力規則に基づき一人で入力する) も提供している。

Q / CART は一般的に高額だと聞いたが、財源は確保されているのか。

A / 昨年度だけでも聴覚障害学生支援に 110 万ドル (日本円にして約 9,000 万円～1 億円) を支出している。主に文字通訳と手話通訳に使ったが、やはり CART の占める割合が大きい。ただ、教室という場で使うことを考えると話された内容が正確に書き起こされていることと、通訳者などの意見や考えが混じらないという点で CART が良い。このように書き起こされた文章から、重要な部分を自らの力で考え、選択し、吸収することが学生のエンパワメントにもつながる。

Q / 在籍する聴覚障害学生が集まってイベントなどをしたり、企画したりするか。

A / 学期中は 1 週間に 1 回、「サイニングランチ」というものが開かれている。手話で話しながら昼食をとるというもので、十数名が参加している。しかし、授業で主に文字通訳や補聴機器を使っている学生の参加はほとんどない。

Q / 大学に入ってから手話を勉強したいという聴覚障害学生のために何かサービスはあるか。

A / 大学には、ASL を教えるフルタイムの教授が 2 名在籍しており、その先生が ASL の講義を担当している。手話を覚えたい学生がいる場合は、その講義を取ることができる。聴覚障害学生も手話を覚えたい場合には、聴者の学生と同様にこの講義を取ることになる。昨年度は、文字通訳を使っている学生のうち 5 名が ASL のクラスを取った。

Q / 聴覚障害学生に関する質問や相談はすべて Cullins 氏 1 人で受け付けているのか。

A / まずは、障害担当部署の障害カウンセラーが対応する。私の場合は聴覚障害学生・教員のみを担当している。また、例えば、聴覚障害と学習障害と両方の障害がある場合は、学習障害に関する専門知識を持つ学習障害担当と聴覚障害に関する専門知識を持つ私と一緒に担当する。

このように、聴覚障害に関してはとにかく私に集約される体制になっている。これは、昔からの体制をそのまま継続しているためである。15 年前は、支援の必要な聴覚障害者が、今の 45 人 (学生 30 人、教職員 15 人) の半分くらいの人数だったので、全学の統一した制度で支援ができるように現在のような体制をとった。それが現在も続いているという状況で、私としては現状の担当範囲が広すぎると考えている。

Q / 聴覚障害学生支援コーディネーターにはどのような知識が必要か。欠かせないことはあるか。

A / コーディネーターになるためには、オーディオグラム、聴覚障害者に必要なサービス、提供できるテクノロジーなど聴覚障害に関わるあらゆる支援手段を適切に提供する技術とノウハウが必要であると考え。進化するテクノロジーについて行くことも必要となる。さらに、ろう者に関する文化的意味が理解できる必要もある。

自分に関していえば、手話通訳者としての認定を受けている。やはり認定を受けられるレベルのコーディネーターが必要だと考えている。その理由は、授業に配置する手話通訳者を評価する必要があるためである。現在 80 人の登録手話通訳者がいるが、彼らを慎重に評価して採用している。なぜなら、すばらしい教授の非常に面白い授業があっても、手話通訳がだめだとそのすばらしさやおもしろさが伝わらなくなってしまうためである。文字通訳も同様であるが、評価は手話通訳よりも比較的簡単である。

また、手話通訳を適切に提供する技術や知識という意味では、手話通訳者がどの場所に座るか、通訳が必要な人はどこに座るかなども大切である。なぜそうするのかという事情を知らないと、聴覚障害者が情報を得にくくなる。これらの要素が必要と考える。

Q / コーディネーターという仕事に興味がある。どんな仕事だと思うか。

A / 大変な仕事だと思う。聴覚障害に関わるあらゆる支援手段を適切に提供する技術とノウハウを十分にわかっていることが、コーディネーターとして大切である。どうすれば良いのかがわかる人が必要。さらに、整理整頓がうまくできる人。100 人近い通訳者や学生に加えて補助機材などをす

べてマネジメントできること。また、人とのよい人間関係が築けること。すべてのことに人が関わるから。シアトルは米国の中でもろう者の人口が多い。通訳者を確保するにはそれなりに努力が必要になる。ぜひ大学に来てほしいとお願いして通訳者を確保している。そのためにはまず人間関係を築くことが大事だと思う。UW はワシントン州で最もよい大学であるので、すばらしい授業を聴覚障害学生に届けるために、質の高い通訳者を確保する必要があると考えている。

Q / 1人で全大学の聴覚障害学生支援を担当していることのメリットとデメリットは何か。1人で判断に迷うようなことを仲間と話すことはあるのか。

A / UW の場合、全学的に均質な通訳者や支援サービスを提供出来るのがメリットだと考える。また逆にデメリットは自分のような人、1人だけが非常に忙しくなること。もしも仕事が順調に進まない場合には、対応が厳しくなる。その状況で何か起きたときには、さらに仕事は大変になる。また、仲間との相談で言えば、近隣大学のコーディネーターと月に1度は懇談をする機会をもち、情報交換をするようにしている。

Q / 手話通訳者や文字通訳者について、どのような点に注意して通訳者を採用するのか。研修などはあるか。また通訳謝金はどの程度支払うのか。

A / やはり、担当する授業の知識や経験などがあるかに注意して採用を決定する。手話通訳者や文字通訳者は基本的に個人契約になるので研修などは行わない。ただ、以前外国語の授業を担当する通訳者がおらず、今いる通訳者でその言語と近い言語の話者を探して1学期前に授業を取ったり、勉強してもらったりしたことがある。そのときには、事前準備に対しても謝金を払った実績がある。通常の通訳謝金はだいたい50～70ドル/時間程度。通訳者それぞれがレベルに合わせて自分のレートを持っているので、それに合わせて支払っている。

3つキャンパスを有する規模の大学で、聴覚障害学生支援を1人で担っている Cullins 氏にどれだけの負担がかかっているのかについては想像に難くない。実は、UW には昨年までもう1人アシスタントがいたとのことだが、予算削減のため、この人件費をカットしたとのことであった。もちろん Cullins 氏には、この人件費を確保し、情報保障の経費を削るという選択肢もあった。しかしそれをしなかったのは、それらの工夫や苦勞を行ってでも、国内でも最高峰の教授陣の授業をその質を落とさずに伝えたいとするコーディネーターならびに大学のポリシーがあったからであろう。また、情報保障としては割高になる CART を使うことに対して、

UW の質の良い授業をそのまま聴覚障害学生にも受講して欲しいというコーディネーターの思いが強く伝わってきた。たとえ ADA (障害を持つアメリカ人法) などの法律の後押しがあるとはいえ、情報保障の提供のために、これだけの予算を割くということは、情報保障の質に対しても責任を負っていると考える大学の姿勢の現れと言えよう。

6. 聴覚障害学生・生徒を対象としたサマープログラム

UW での視察は事前の予定では午前中のみ、Cullins 氏との懇談を終えたところで終了する予定であった。しかし視察時、偶然 UW 内で聴覚障害学生・生徒向けのサマープログラムが開催されているとの情報を得て、この様子を見せていただくことになった。以下、そのプログラム様子を報告する。

このサマープログラムは、全米から特にコンピュータサイエンスに興味を持つ優秀な聴覚障害のある学生・生徒を集めて、ひと夏、3ヶ月間開催されているもので、今年で5年目になるとのことであった。Gallaudet 大学の教育運営委員会 (Board of Trustees) のメンバーでもある Richard Ladner 先生が主管されている。受講生は、高校生または大学1年生までの学生・生徒で、数学と科学の成績が一定以上あることが参加条件になっている。定員は10名であるが、今年は、優秀な学生・生徒が多いために定員を越えて13名が受講しているとのことであった。このうち、大学生が3人、高校生が5人、今年5月に卒業して9月から大学に入学を予定している5人という内訳であった。受講生は、全員聴覚障害のある学生・生徒であるが、彼らのコミュニケーション方法は、キュードスピーチ、手話、文字通訳、触手話などさまざまで、それらが入り乱れているという。ただ、このプログラムが終了する頃には、次第に皆手話で会話をする様子も見られるようになるということであった。実際にその受講生たちが講義を受けている教室へ案内していただいた。

授業が行われている建物は、Bill Gates 氏と共にマイクロソフト社を立ち上げた Paul G. Allen 氏が多額の寄付をして建てたものとのことである。彼は UW の卒業生で、この建物に限らずあらゆるところで寄付を行っているとのことであった。そのような理由でこの建物は、Paul G. Allen Center for Computer Science & Engineering と名付けられている。講義で使う教室は、コンピュータの設備が充実していて、聴覚障害学生のために手話通訳と CART による文字通訳が付いている (この情報保障の手配も、Cullins 氏が担当した)。

今回見学をしたのはアニメーションプログラムの授業だった。内容は、アニメーションを作成するときに物体がどのような動きをしているのかを把握し、これを元にプログラミングし

てアニメーションを動かすというものだった。教室では、UWの学部生（聴者）が先生となり、補助として Rob Roth 先生が見守る形で進められていた。

この Rob Roth 先生自身も聴覚障害者で、このときは授業を抜けて私たちに授業についての説明をして下さった。お話によると、このプログラムでは、ただアニメーションプログラムを勉強するだけではなく、この分野の研究者の話を聞いたり、コンピュータサイエンスの現場で活躍する聴覚障害者にゲストスピーカーとして来てもらったりするということがある。また、近隣にあるハードウェアやソフトウェアの企業（例：マイクロソフト、アインライン、google など）の企業訪問も行う。しかも、このアニメーションプログラムの講義には、大学の正式な単位が付与されるとのことであった。受講生のうち現在大学に在籍している学生はもちろん、これから入学する生徒たちも大学入学後に申請すれば単位として認められるとのことであった。

見学の途中から、サマープログラムを統括している、Richard Ladner 先生が質疑の輪の中に加わってくださった。Ladner 先生曰く、このプログラムの目的は「コンピュータサイエンスは誰にでも出来るものである」ということを知ってもらうこと、そして実際に興味を持つ学生に「経験」してもらうことである。その「経験」を通して、自分に合っている場合にはその道に進む、合わないと思えば他の道を探すという選択のためにこのプログラムを使って欲しいとのことであった。そのため、何がなんでもコンピュータパーソンを養成しようという目的ではないというお話を興味深くかかっていた。

修了生達はその後 Facebook などを活用し、交流を続けているとのこと、今年はその中から 3 人が、ティーチングアシスタントとして戻ってきてくれたというお話であった。

世界に名の知れたコンピュータ関連企業の卒業生によって建てられた校舎で、コンピュータ設備、情報保障が整えられ、さらにすばらしい教授陣に囲まれて授業を受けられるというサマープログラムであるが、そこには絶対にコンピュータパーソンにならなければいけないというプレッシャーはない。受講生達には、自分の好きなものを最高の環境で集中して勉強できるという UW でなければ得られない「経験」が提供されている。しかも、通常の講義と同様に、高い技術に裏付けされた手話通訳と CART が提供されており、多くの聴覚障害学生にできるかぎり質の高い経験をさせてあげたいとする UW の大学としての姿勢ならびに、それを支える Cullins 氏のコーディネーターとしての熱い思いを感じ取ることができた。このサマープログラムの見学を許可して下さった、Richard Ladner 先生、Rob Roth 先生そして、多忙な中、見学の際の通訳も担当して下さった Tobias B. Cullins 氏に改めて感謝を伝えたい。

7. まとめ

AHEAD では常に自らの仕事を分析し、ときには省みることをしながら業務を行うコーディネーターや障害学生支援担当者の姿を知ることができた。彼らは、日頃の業務を検証するために、常に複数の角度から自分の仕事を見つめ、可能な限り客観的に物事を捉えようとしている様子が見てとれた。また AHEAD のような場で日頃の検証結果を発表することで、自らの仕事に目標を課すとともに、同じ志を持つ仲間と共に日々の業務を振り返り、コーディネーターや障害学生支援担当職員の仕事に不可欠な規範を作り上げていくことは非常に重要な取り組みであると感じた。コーディネーターがしっかりとその専門職としての知識と経験を活かし働くことは、ひいては ADA などに記載された障害のある学生の権利を守ることもつながる。そしてそれは、コーディネーターが働く大学にとっても、組織として法令を遵守することにつながり、大学・コーディネーターの双方にとって利益の大きい好循環を生むことになる。こうした循環が、最終的にはコーディネーターの身分保障にもつながるものと考えられ、我が国においても参考にしていけるべき姿であると考えられる。

一方、UW の視察では、たった 1 人で大規模校の情報保障手配をこなすコーディネーターの姿があった。そこには学生に対して最高の教育を行うという大学のポリシーがあり、聴覚障害学生に享受させるためには質の高いアクセスサービスが不可欠との考え方がなされていた。大学が最高の授業を提供し、それらを受けた学生が卒業して成功を取れば、それは後々大学の利益として還元される。そのため、質の高い教育を提供して大学としての価値を上げることは、大学を存続させていく上でも非常に重要であり、アクセスサービスはそのための手段にすぎないということであろう。もちろんこれには予算的制約がともなう。しかし、UW ではそうした制約よりも、本来大学が追求すべき教育の質を最優先させている点で、学ぶべきポリシーを感じた。

本視察を通して、AHEAD や UW のような関係各所が win-win の好循環を大学内外に生み出している様子が見てとれた。ここで得られた知見を参考としながら、PEPNet-Japan がこれまでに築いてきた全国のネットワークを活用し、連携大学・機関の方々とともに、日本における聴覚障害学生支援をよりよい好循環へと導いていく道筋を探りたい。

8. 付記

本視察は、文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成 19 年度～ 23 年度）による聴覚障害学生のための拠点形成事業の一部である。

なお、本視察を通して日英通訳として瀧澤亜紀、渡部 綾、両氏に多大なるご協力をいただいた。末筆ながらここに感謝の意を表す。

A Report from the 2011 AHEAD Conference and Inspection of Universities in Seattle, WA. in the U.S.A. the 9th PEPNet-Japan Study Tour

HASUIKE Michiko, ISHINO Maiko, OHASHI Hiroe, SHIRASAWA Mayumi, NAKAJIMA
Akiko, ISODA Kyoko, SEKIGUCHI Hiromi and HAGIWARA Ayako

Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired,
Tsukuba University of Technology

Abstract: The Association on Higher Education And Disability (AHEAD) is one of the most important organizations when we survey a support system for disability students in higher education settings in the U.S. The Postsecondary Education Programs Network of Japan (PEPNet-Japan) collected information about hot topics in support systems for disability students by attending the 2011 AHEAD conference and visiting some universities in Seattle, WA. At the AHEAD conference, there was a session during which we learnt about how the content of support services was verified by the person in charge of the disability support office and was mutually evaluated by other universities. From that session, the importance of thinking about one's own support services objectively and from various perspectives was clarified. In addition, we visited the University of Washington where we met a service coordinator working for students who are Deaf or Hard-of-hearing and learned access services policy for high-quality content of lectures. We also visited a summer program for Deaf or Hard-of-Hearing students. We realized that the meaning of learning is students learning from high-quality lectures in a full access settings.

Keywords: Deaf or Hard-of-Hearing, Disability support services, Service coordinator, AHEAD